Contact Zone 2017 特集論文③

序――Teaching Anthropologyの挑戦
――調査と教育と社会の結節点を探る

南出和余

本特集は、2016 年 7 月 16 日に京都大学人文科学研究所において開催された京都人類学研究会 7 月季節例会シンポジウム「Teaching Anthropology の挑戦――調査と教育と社会の結節点を探る」をもとにしている[1]。本シンポジウムでは「文化人類学を教える」という営みに着目し、各々が日々実践している「文化人類学を教えること」の経験と情報を共有するとともに、「教えることに関する人類学」を検討した。この「文化人類学を教えること」と「教えることに関する人類学」、つまり「教育」と「調査」という 2 本の柱の接点は、他者との交渉を不可欠とする人類学実践においては自ずと「社会」との接点をも意識させる。本シンポジウムでは、人類学教育実践を通じて、調査と教育と社会の結節点を探ることを目的とした。

「文化人類学を教えること」

大学教育の場において「実践教育」や「アクティブラーニング」など講義形式の教授に留まらない学生の主体的参加型学習の重要性が注目されるようになって、すでに久しい。研究においては参与観察（フィールドワーク）を重視する文化人類学を教育の場に運ぶとき、人類学者がこの参与観察に参加型学習の可能性を見出そうとするのはごく自然であり、実際に多くの人類学者が学生に対してフィールドワークを促す試みを実践している。大学教育に従事する人類学者が各々に取り組んでいるフィールドワークを中心とした教育実践について情報を共有することが、本特集の第一の目的である。

研究としてのフィールドワークが各々の人類学者の唯一無二の経験になりがちなように、学生に促すフィールドワークもまた往々にして唯一無二のものとなりがちである。しかし、フィールドワークそのものが各々の取り組みによって、あるいはそれを実践する学

MINAMIDE Kazuyo　桃山学院大学　kazuyom@andrew.ac.jp

1 本シンポジウムは、京都人類学研究会、日本文化人類学会課題研究会懇談会「応答の人類学」、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究（A）「応答の人類学」（代表：清水展）、2015 年度公益信託澁澤民族学振興基金民族学振興プロジェクト「大学教育とフィールドワーク」研究会の、計 4 者の共催として開催された。「大学教育とフィールドワーク」研究会の代表である亀井伸孝がシンポジウムでの趣旨説明を担い、本稿は亀井によって執筆されるはずであったが叶わなかったので、発表者の一人であった南出が代わりに執筆している。

生によっても異なるとしても、それらを共有することに意味がないわけでは決してないことは、研究におけるフィールドワークの記述が不可欠なことからも、明らかである。さまざまに展開される教育実践に関する情報から他の人類学者が何らかのヒントを得て、それを各々の教育実践の場に適応するかたちにアレンジし、新たな教育実践が生み出され、そうした連鎖が全体として「文化人類学を教えること」の意義を提示しうる。その意味で、本特集で紹介される事例は各々が教育実践の一例であり、フィールドワーク教育の在り方を定義するものではない。

「教えることに関する人類学」

本特集論文のなかで飯嶋秀治は、「文化人類学を教授する私たち自身の教育の場も、ごく身近なコンタクト・ゾーンになる」と述べている。すなわち、「人類学者と他者との出会いの場」がコンタクト・ゾーンであるならば、人類学の実践教育の場において、教員である人類学者と、学生、さらに実践教育に協力してくれる「調査対象」の人々、という三者が出会い、その教育の場が人類学者にとっての研究の場にもなる。「教育」という営みを介して学生のことを知る、というのはよくあることである。フィールドワークという実践教育の場に限らず、ゼミなど議論の場においても、相互行為を通して教員の側が、学生たちの関心や価値観、あるいは「若者文化」を知る。そこで得た学生に関する情報や知識がもととなって新たな教育実践が展開される。つまり、人類学者は教育の場をフィールドとし、学生を対象として、そこで人類学を展開しているともいえる。しかし、それが意識化され記述されることはあまりない。

さらには、教員と学生のみによって構成される教室の場ではなく、実践教育の場に出て学生たちにフィールドワークを促す場合、それに協力してくれる「調査対象」の人々もまたコンタクト・ゾーンでの出会いを構成している。ここでの「調査対象」は、学生たちへの教育を第一義的目的とする場合には「疑似調査対象」ともいえるかもしれない。しかし、教育における実践性が重んじられるにつけ、学生たちが成果として生み出すエスノグラフィーには学習に留まらない記録の意義（意味）が確かにある。そこで暮らす人々と学生たちが、教員も含めて、生身の人間同士として出会い、互いに影響を及ぼしあう場が展開されているのである。こうした「教育の場」を人類学することが、本特集のもう一つの目的である。

このように、「文化人類学を教えること」の共有と「教えることに関する人類学」の展開という 2 つの視点から Teaching Anthropology の意義を考える。大学における文化人類学教育の在り方を探ることは、人類学に携わる私たちにとって大きな関心であるだけでなく、人類学の学問分野としての将来を左右する重要な営みでもある。また、「教える」ことを通じて文化人類学そのものを捉え直し、学生たちについての理解を深め、かつ、社会とのつながり方を確かめることとなるだろう。

特集の経緯と目的

本特集のもととなったシンポジウムは、以下の構成によって開催された。

趣旨説明．亀井伸孝（愛知県立大学准教授）
報告 1.　亀井伸孝「学生とともに行う『旅の写真展』の実践報告
——ウェブ全盛の時代にモノと情報との付き合い方を学ぶ」
報告 2.　南出和余（桃山学院大学准教授）
「映像制作を介したコミュニケーション——映像人類学教育実践」
報告 3.　飯嶋秀治（九州大学准教授）
「コンタクト・ゾーンとしてのエデュケーション——罹災半世紀後での民族誌媒介行為」
報告 4.　シディクル・ラフマン（バングラデシュ・ジャハンギルノゴル大学准教授）
「バングラデシュの人類学教育事情」
コメント 1．橋本和也（京都文教大学教授）
コメント 2．大西秀之（同志社女子大学教授）

このうち、本特集には、南出和余による報告 2 と、飯嶋による報告 3、およびコメンテーターとして実践事例を用いて議論に参加してくれた大西秀之による報告を収めている。

また、このシンポジウムの前身として開催された「日本文化人類学会公開シンポジウム」についても言及しておきたい。この公開シンポジウムは、2014 年 7 月 26 日に名古屋にて以下 6 人による実践報告をもとに開催され、人類学者だけでなく大学生や高校生、一般からの参加も含め、約 120 名が参加した。

『大学で学ぶ文化人類学——フィールドワーク教育の試みと可能性』

報告 1.　赤嶺　淳「学生とともに聞き書きをする——インタビューと記録の技法」
報告 2.　亀井伸孝「学生とともに写真展をする——野外撮影の技法と公開の姿勢」
報告 3.　南出和余「学生とともに映像作品を作る——映像人類学の技法と新たな表現発信」
報告 4.　内藤直樹「学生とともに地域に暮らす——調査実習と地域への成果還元」
報告 5.　竹川大介「学生とともに店を出す——市場からまなぶ人づきあい」
報告 6.　松田　凡「学生とともにエチオピアを訪ねる——海外調査実習と国際協力」
コメント．和崎春日

こうした議論を通じて、近年の環境の変化について、いくつかの論点が明らかになった。

まず、近年、大学教育の質的転換は著しく、知識偏重教育から問題発見解決能力育成といった教育理念への転換がおこっている。そうしたなかで、PBL（Problem Based Learning：問題にもとづく学習）教育の必要性が唱えられ、座学よりも自ら調査を実践す

ることを通じて実践的に問題発見解決能力を習得することが奨励されている。この潮流は大学に留まらず、中学校や高校にも及んでおり、フィールドワーク教育が中等教育に視野を広げる可能性を帯びている。

次に、学生をとりまく環境と関心の変化もまた著しい。各自がスマートフォンを持ち、知りたい情報は検索サービスが即座に提供してくれ、SNS で相互に密接に繋がりあう社会関係のなかで、あえて屋外に出て五感を活用し、ふだんの仲間内とは異なる他者と出会い、一次資料を収集して、それを公開するというフィールドワーク教育は、いかなる意味を持ち、かつ課題を抱えているのだろうか。

本特集では、こうした時代にあって、学生たちとともにいかに人類学教育を実践していくかを検討する。人類学教育の目的、方法、そして教育を介しての新たな発見、それらを学生と教員と社会をつなぐ営みとして注目したい。